辻潤全集

第三巻

五月書房

辻潤全集　第三巻　定価三八〇〇円

発行日　昭和五十七年八月十五日
著　者　辻　潤
発行者　竹　森　久　次
発行所　株式会社　五　月　書　房
東京都千代田区猿楽町二丁目六番五号
郵便番号　一〇一
電　話　〇三（二二三二）四一六一番
振　替　東　京　九　一　三　三　九　四　三

モリモト印刷・小泉製本

ISBN 4—7727—0003—X

辻潤全集　第三巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目

次

癡人の独語

いずこに憩わんや？
――あるいは『癡人の独語』の序に代う――

錯覚した小宇宙

錯覚した小宇宙……19
錯覚自我説……25
あるばとろすの言葉……31
えふえめらる……37
ぺるめるDROPS……40
ふらぐめんたる……42
ダダの吐息……44
ダダの言葉……47
サンふらぐめんた……50

おうこんとれいる

おうこんとれいる……59
迷羊言……65
自己発見への道……72
自分はどのくらい宗教的か？……79
和尚はどうして「明徳」を明らかにしたか？……87

妄語

惰眠洞妄語……101
痴人の独語……107
痴人の手帖より……113
「英雄」は過ぎゆく……119
あまちゃ放言……123
もっと光を！……129

かばねやみ

天狗になった頃の話……139
だだをこねる……145
変なあたま……150
瘋癲病院の一隅より……156
木ッ葉天狗酔家言……161

ひぐりでいや・ぴくりでいや

ひぐりでいや・ぴぐりでいや……169
のっどる・ぬうどる……189
天狗だより……195
かばねやみ……205

1＋X

鏡花礼讃……219
無想庵に与う……228

交遊観……230

れみにせんちゃ

ものろぎや・そりてえる……237
あさくさ・ふらぐまんたる……258

あぶさるど

不協和音で arrange されたMOZAIK……269
あぶさるど……274
「享楽座」のぷろろぐ……276
楕円の月……279

子子以前

れざんどらん
——序にかえる——

PENぺん草

子子以前……291
PENぺん草……303
仏家の思想教化について……313
惰眠洞放言……314
もう・てんとあかん……318
シンガポールの夢……320
のつどる・ぬうどる……325

あむぷれっしょん

宮崎滔天を憶う……335
ひとりの殉難者……365
海笛のカケラ……369
生田長江氏のことなど……372
シェストフについて……378

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

癡人の独語

いずこに憩わんや？

――あるいは『癡人の独語』の序に代う――

われわれが生きている間は太陽や空気や「宇宙線？」の影響を免れないと同時に、さまざまなバイ菌の影響から免れることも出来ないのである。聴きたいと思わない時でも無遠慮にラジオはさまざまな音響を放送してくる。われわれもまたひどく饒舌である。「文学」は畢竟、饒舌の異名に過ぎない。溪声山色長広舌という有名な文句があるが、まったくその通りである。

現在の私の唯一の欲望とでもいうべきものはどこかに「隠遁」したいということだけである。陶淵明のことなどを時々考えてみるとひどく羨望の念が起こってくる。彼氏にはかえり得る故郷があった。しかし、私の場合においてはかえるべき故郷もないのである。たとえ故郷がないにせよ、金さえあればどこか落ち着き得る静かな山間を選択することも出来るのであろうが、肝腎の金がなければそれを実行しようという第一気持ちさえ起こってはこないのである。私は病人でもあり年もとったのである。恐らく社会的に見れば立派な落伍者であり、無益な人間であろう。であるが故に、

せめて少しなりとも他人の邪魔にならないような生活をしたいものであるというのが偽りのない現在の念願なのである。まことに元気のないこと夥しいものがある。

私は昨年東北の旅からかえってからというものはまったく住所不定で、あちこち友人や親類の間を彷徨して厄介をかけていた。住所が不定なため落ち着いて友人諸君にハガキを出す気持ちも起こらず、況んや原稿などを書く気など更に起こらなかった。頭のわるくなったのもその原因ではあるが、なにより落ち着いてねるところがないのでは、仕事が手につかないのは無理もないと思ってもらいたいものである。

さて、私は最近『癡人の独語』という文集をやっと出すことが出来る機会を得た。私はそれによって久しぶりで自分の独立した部屋のある家に住むことが出来そうなので、今からそれを楽しみにしているのである。まったくどう考えてみても私は一個の「痴人」以外のなにものでもない。自分のことを「痴人」などと称することは見方によるとイヤ味な感じがしないこともないが、ほかに適当な言葉を探しあてることが出来ないので、しばらく「痴人」を借用しておくのであるが、その音からくるかんじがなんとなく「ツジジュン」ときこえないこともないのである。

この中に納められた零細な雑文は過去数年間における「痴人」の「生活記録」であって、いわば一種の「報告書」でもある。私はこの文集を別段改めて世に問おうというような了簡は少しも持ち合わせてはいない。ただ従来私のような人間の書くものでも愛読して下さる人達へ、私がどうやら未だ生きているということを知らせ、多少自分の最近の心持ちを伝えたいためにほかならない。

私がまことに滑稽な洋行をすませてかえってきた時に、Y新聞に「西洋からかえって」という短文を書いた。その中に私は露伴と鏡花の両先生にちょっと言及したので、「辻潤は巴里みやげに露伴と鏡花を携えてかえった」といってひやかされた。それから引きつづき西洋文明にケチをつけるようなことを時々発表して、「反動派」になったといって知友から嗤われたりした。しかし、私の書いたものを熟読している人なら、私が無茶苦茶に西洋を貶(けな)しているのでないことはわかってもらえると思う。だが、西洋にもいわゆる科学文明に反対している人達はいくらもある。私は「科学文明」そのものが別段わるいとかいいとかいうのではなく、現在のような人間の道徳意識の水準から推して、どう考えても機械文明はよろしくないと考えているのである。

人間の生活の幸不幸からいったら少し極端な話かも知れないが、例の老子「小国寡民」説に賛成せざるを得ないのである。しかし、恐らく何人もそれが直ちに実現出来るものであるとは信じないであろう。しかし古来からのいわゆる「文明」なるものは幾度か栄えては亡んでいる。「文明」が亡びるということと「国」が亡びるということとは別である。日本でも「江戸文化」はなくなったが、反対に新しい西洋の文化が侵入して、現在では日本独特な域にまで到達してきている。

話が少しそれたが、大体において、この書は自分の矛盾した支離滅裂な意識の表現だと思ってもらえばいい。いわば「痴人の迷妄」を語るもので、いつまで経っても澄みきった心境などには到達出来そうもない。もっとも親鸞のような人でさえ、「いずれの行も及びがたい」と告白しているのだから、自分のような人間が迷っているのはあたり前の話だと考えている。

人間の賢愚強弱美醜は天地自然の道理？　であっていかんともなしがたい。しかし、等しくこの世に生を享けて生まれてきたのであるから生きる権利があり、愚者は愚者なりに、弱者は弱者なりに物をいう資格があると思うのである。私はこれまでに比較的自分のいいたいことをいってきたし、やりたいと思うことをやってきた。初めから三井、岩崎を志したこともなければ、ゲーテ、シェークスピアを目標としたこともない。だからその点ではなんの悔いもかんじてはいない。ただ自分の書いているものがいわゆる「文学」であるかないかは別として、なんらかの意味で同類のために幾分でも慰めになればそれで私は満足なのである。

自分のように生活力の薄弱な人間がよくもこれまで生きてこられたと、時々不思議に考えることがある。幸い私は次第に外界の物欲に誘惑をかんじることが年と共に少なくなってきたので、自分だけは気楽であるが、しかし、省みて自分のような人間を「父」に持った子供達に対してはまったく頭があがらず、なんといっていいか、弁解や謝辞の言葉をさえ知らないのである。

自分は従来ダダだとかニヒリストだとか自分でもいってきたし、人からもいわれてきた。しかし、私は現在あらゆる符牒やイズムから解放されたいものだと思っている。まったく名の名とすべきは常名ではないのだ。しかし他人がとやかくいうのは勝手次第であるが、私はこの際、一切の名目を放棄したいと思うのである。「形空虚に充ちて、乃ち委蛇に至る」という文句が荘子の中にあるが、自分に理想がありとすれば、強いてそんな風なものだといいたいのである。

人間には天地の正体を把握することが出来ないように、自分の正体をもハッキリと摑むことは不

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co